

関東地方における女体社の調査概報（中）

牛 山 佳 幸

（第六十五号掲載報告の続き）

※前号では一九八八年十一月末の時点で現地調査が終了していた十八社について、取材ノートに基づきつつ現況を述べた。本号では、その後調査することのできた三社を追加すると共に、現存はしないが、他の神社を合祀したために社名が変わったり、もしくは他の神社に合祀されたことが判明したもの八社についても、併せて調査結果を報告しておきたい。

⑱ 栃木県真岡市台町二四六〇番地 熊野女体神社

行屋川のほとりに鎮座す。田町方面より橋を渡れば、すぐ右手の小高い丘全体が境内となれり。現在の社地は台町に属することよりすれば、田町と台町はこの川が境界となれるがごとし。『真岡市史民俗編』（一九八六年）の記述に「田町の女体社」ともある（九〇頁）

のは、かかる位置関係によって生じた誤記か。丘上は平地だが、さほど広くなく樹木もほとんどなし。建造物と言え、境内入口に建つ朱の鳥居と三間切妻造り、トタン葺の拝殿および覆堂に納められた本殿（一間社流造りと思わる）のみ。鳥居には題額もなく、社名を記した標柱も境内には見当たらないが、拝殿の額に「女体ムスメ」と記されることによって、女体社であることが知らる。ちなみに、「ムスメ」は「殿」のくずし字か、それとも花押の類いなのかは判断に苦しむ

（写真Ⅲ参照）。前掲の『真岡市史民俗編』によれば、かつては針供養の際に当社に針を奉納したと見え、女性による信仰との結びつきが想定されるが、現在も行なわれているかどうかは未確認。境内には何らそれらしき碑もなく、案内板もなし。とにかく、石塔・石仏の類いも見当らず、仏教色が全く感じられないのも、これまで踏査した例と比較して、やや不審。真岡市内からは西北に日光連山、東南に筑波山を望むことができ、女体神が勧請されたことが有力視される二つの山が、ともに望見できる事実は意外と言うべきか。

⑳ 埼玉県北埼玉郡騎西町芋茎戸塚 女体神社

『新編武蔵風土記稿』（卷之二百十、埼玉郡之十二、芋茎村の項）に見えながら、『全国神社名鑑』に掲載されない女体社の一つ。あ



〈写真Ⅲ〉

栃木県真岡市台町2460
熊野女体神社拝殿の額

るいは同じ町内の玉敷神社（騎西町騎西五五二番地）に合祀されているのではと、同社をまず訪れたところ、前宮司河野道雄氏および騎西町編纂事務局主査正能晴雄氏の御協力、御教示を得ることができ、同町芋茎字戸塚地籍に現存する、通称「権現さま」がそれと判明した。同社は神社本庁に登録されていない神社らしい。『全国神社名鑑』に記載のない理由もこれによるか。

さて、「権現さま」は田園の中の、農道に沿った狭い一区画に鎮座する典型的な小社。社地の半分をこの地区の集会場が占める。鳥居もなく、拝殿もなく、社殿は切妻造り、瓦葺の覆堂に納まった本殿一字のみ。流造りの本殿（これは宮殿とすべきか）内に「筑波男大神」（向って右側）、「筑波女大神」（向って左側）と書かれた木製の御札あり。筑波信仰との関わりが顕著にうかがわれる。社殿の背後に小さな石碑があり、「女鉢宮」の刻字が見ゆ。境内に樹木は全くなし。境内社もなく、「伊勢参宮記念碑」一基あるのみ。

向いの農家の主婦（武藤方）より聞き取りす。「権現さま」が女神を祀る神であることは承知の由だが、現在では「女体さん」とは呼ばないとのこと。また、「養蚕をやっている頃は筑波参りをよくしたが、養蚕をやめてからはそれもなくなった」との話は興味深い。が、養蚕と筑波信仰との関わりについては、それ以上の聞き取りはできず。なお、玉敷神社の拝殿前には、大正八年（一九一九）に「筑波山太々講中」が奉納した狛犬が一对あり、台座にその旨が刻まれる。奉納者はいずれも男性名の如し。前記の河野・正能両氏のお話によれば、戦前にはこの地方にも筑波講があったが、現在では全く行なわれていない由。ちなみに、当社の神宝「お獅子様」は各

地に運ばれてお祭りをするが、女体神社が現存する加須市船越がその地区の一つとなっているのは全くの偶然とも思えず。

② 埼玉県草加市中根町 女体神社

東武伊勢崎線松原団地駅の東北約一キロ、松原食品(株)の隣りに鎮座す。西数百メートルのところを綾瀬川が流る。南北にやや長く参道が続くが、境内は狭し。入口の鳥居の欠損した額に、「女體神社」とわずかに読みとれる。拝殿はなく、瓦葺切妻造り、石積式の本殿一字のみ。内部に正面唐破風付の宮殿あり。境内社は二社、草加市史調査報告書第三集『草加の社寺』（一九八五年）によれば、稻荷社と御獄社らしい。参道両側に天保三年（一八三二）奉納の石燈楼二基、享保十二年（一七二七）銘の青面金剛庚申塔あり。後者の庚申塔には「本願施主 清水甚兵衛 濟藤忠右衛門」の「助願施主 當村中 結縁衆 善男善女……」との刻銘が判読できる。このうち、善男女として記される十一人がいずれも女性名であることは注目に値するが、本願施主が男性である点からすると、必らずしも当社が女性のみによって信仰されていたわけではないことを示すものならん。他に明和五年（一七六八）氏子増田氏奉納の手水石あり。

当社は、『新編武蔵風土記稿』巻之百三十八、足立郡之四、中曾根村の項に「女體社（村の鎮守なり、泉等寺の持）、末社、稻荷社」とあるものにあたる。前掲の『草加の社寺』23頁、96頁の記載によると、明治四十年（一九〇七）五月二十一日に旭神社（現草加市金明一三三二番地に鎮座。明治四十年に社号を氷川神社から旭神社に改称し、同年から翌年にかけて近隣三十六社を合祀したとある）に合祀されたが（典拠は示していないが『神社明細帳』に拠るか）、昭和三十三年（一九五八）

に新社殿が旧地に再建されて、現在に至っているとの由。しかし、『全国神社名鑑』に登載されていない点からすると、これも神社本庁へ未登録の神社か。

② 神奈川県川崎市高津区馬絹九八六番地 馬絹神社

『新編武蔵風土記稿』卷之六十二、橘樹郡之五、馬絹村の項に所見のある「女體権現社」は、現在川崎市高津区馬絹に鎮座せる馬絹神社に合祀される。同神社境内入口に建つ「馬絹神社建設の碑」の碑文を左に掲ぐ。

馬絹神社は古き時代より、地域住民の守り神として、人々から崇敬されてまいりました。

御祭神は伊邪那美命であり、縁結びの神、開運の神として、広く知られております。

御神木千年の松があり、頼朝公、袖掛の松と伝えられております。古文書に女體権現の社地として、五反二畝歩と記録されております。

明治四十三年三月、女体神社、八幡神社、三島神社、熊野神社、白山神社を統合し、神明神社と改称、村社に成った由緒ある神社であります。

昭和四十五年六月、社殿の老朽化に伴い、本殿神楽殿の建設を決議し、十年の歳月を経て昭和五十四年十月、神楽殿が完成しました。

昭和五十八年七月、役員会を開催し、本殿の建設を決定、翌五十九年一月、馬絹神社建設委員会が結成され、三年計画を以って建設に着手、昭和六十一年十月、総費用二億五千万円を要

して落成の運びとなり、社名を馬絹神社としました。

このたびの馬絹神社の建設に当り、百六十余名の建設委員を始め、賛同者各位の多大なる御尽力御寄進に対し、衷心より感謝を申し上げ、ここに碑を建て、永く後世に伝えるものであります。

昭和六十一年十月吉日

馬絹神社宮司	長崎 範城
馬絹神社奉賛会会長	篠田 茂男
同 副会長	石渡 武松
同 副会長	都倉 政信

篠田茂男撰文謹書

これにより、明治四十三年（一九一〇）にかつての女体神社の社地に村内の八幡・白山・三島・熊野の四社が合祀されて神明神社となり、ついで昭和六十一年（一九八六）の新本殿完成を機に、さらに馬絹神社と改称された経過が知らる。すなわち、当社は馬絹村の女體権現社の後身とみてよい。当社が立地するのは国道二四六号の沿線にある小高い丘の一つだが、周辺には社宅・マンション等が林立し、また武蔵野線の高架もあるなど輻輳しており、社地へたどり着くまでに難儀す。境内入口から社殿まで急な参道が続く。両側に真新しい石燈楼がぎっしりと並ぶ光景は壮観。拝殿は権現造り、本殿は神明造りか。拝殿の向って左側にも摂社の神明社あり。当社はいつ頃から、伊勢信仰の影響を受けたものの如し。境内には古木はほとんどなく、全体として古社の面影はさほど感じられず。

②③ 埼玉県北足立郡吹上町袋字道上二四八番地 袋神社

『新編武蔵風土記稿』巻之二百十六、埼玉郡之十八、袋村の項に所見のある「女體社」は、現在北足立郡吹上町袋に鎮座せる袋神社に合祀される。その旨は『吹上町史』（一九八〇年）にも指摘されるが（典拠は『神社明細帳』等）、¹¹¹では大正五年（一九一六）建立の袋神社碑の碑文を次に示す。

袋神社碑

從三位勲一等男爵澀澤榮一篆額

秩父之山岿嶢突兀峯然矗峙於莽蒼之中刀根之水渺瀰回縈汪焉奔注于廣野之間斯山斯水襟帶流峙闢成曠區曰武蔵野我下忍邨大字袋其一聯邑也古荒川之水環流為境形若括囊故名云居民素樸動奉公敬神四隣嚮為規範鄉内素有女體伊奈利諏訪天神雷氷川六祠歲時伏臘敬祀奉誠明治四十五年官命合祀諸祠於女體神社大正二年改稱袋神社為一鄉之城隍越二年大正四年秋 天皇舉登極之大典鄉人感誠饌資興工新構祠宇至五年二月工畢矣今試賽斯祠仰望秩嶺之矗峙乎天際俯觀刀水之貫流于曠野崇高之氣勁正之節自生孤高介特之風範顧日露之役壯丁從軍老弱報效闔鄉一致使我閭閻永與山川媲美者咸敬神奉公斯倚也傳曰國之大事在祀與戎是此之謂歟銘曰

山清水淋 草木芬芳 建祠致祭 民風淳良

從戎報効 忠烈煌煌 百神來格 靈德孔彰

大正五年丙辰七月 衆議院議員 指田義雄撰并書

これによれば、近隣にあった女体・伊奈利・諏訪・天神・雷・氷川の六社が、明治四十五年（一九一二）に官命により女体神社に合祀され、ついで大正二年（一九一三）には袋神社と改称されたことがわかる。従って、現社地はかつての女体神社の社地と言うべし。

境内はさほど広くなく、古木も少なし。鳥居をくぐると正面に入母屋造り、トタン葺の拝殿、および一間社流造りの本殿（切妻造りの覆堂に入る）あり。参道にある二組の燈楼には各々宝永五年（一七〇八）と文化二年（一八〇五）の銘が判読さる。境内末社として宇賀神・天満天神・雷神あり。

付近に如台山西福寺（真言宗）あり。かつての別当寺なり。当寺は『新編武蔵風土記稿』に「女體山阿弥陀院と號す」とも記されることよりすれば、現山号の「如体山」は女体山の宛字であることは明らか（現在の本尊は不動明王像だが、旧本尊らしい阿弥陀如来座像が庫裏に安置さる）。本堂須弥壇の脇に厨子入りの女神立像あり。住職井上有岳氏はこれを旧女体社の御神体、奇稲田姫像かと言う。

『新編武蔵風土記稿』に「女體社^{村の鎮守なり、祭神は稲田姫命、西福寺持}とあれば、この推定に誤りなからん（写真Ⅳ参照）。保存が良く、色彩も鮮やか。とくに衣文に残る截金文様は見事と言うべし。これまでの一連の現地調査では、最大の発見ではなからんと思う。岩座上に立ち、左手に繭を持つのは養蚕の神として信仰されたことを示すのか、それと



〈写真Ⅳ〉

埼玉県北足立郡吹上町袋 97
如台山西福寺所蔵の奇稲田姫像
（女体神社の旧御神体か）

も奇稲田姫のごく一般的な姿態にすぎないものか、今後検討を要す。尚、『草加の社寺』によれば、既出の草加市中根町の女体社にも、かつて御神体として木造女神像があったとの由。

西福寺の近辺に「筑波」の町名あり。この地名は終戦後に付けられたもので、現在はこのあたりに筑波山に関わる信仰や伝承はないとのこと。袋地区からは東方に筑波山がよく見えるので、そのことが起源らしいとは住職が知人に問い合わせて得た話。

②④ 埼玉県北葛飾郡鷺宮町鷺宮一丁目六番一号 鷺宮神社
『新編武蔵風土記稿』卷之二百十一、埼玉郡之十三、上内村の項に所見のある「女體權現社」は、現在鷺宮町鷺宮一丁目に鎮座する鷺宮神社に合祀さる。境内に建つ合祀碑に次の如くあり。

武蔵國南埼玉郡鷺宮郷諸社合祀碑

女體社 <small>舊鎮座 上内</small>	稻荷社 <small>上内砂原</small>	神明社 <small>上内間乃道</small>
稻荷社 <small>葛梅</small>	日枝社 <small>上内砂原</small>	愛宕社 <small>葛梅七曲</small>
稻荷社 <small>久本寺</small>	日枝社 <small>上内権名</small>	稻荷社 <small>鷺宮栗原</small>
稻荷社 <small>中妻高浦</small>	湯殿社 <small>上内宿</small>	稻荷社 <small>鷺宮中島</small>
天神社 <small>中妻道下</small>	菅公社 <small>上内間乃道</small>	諏訪社 <small>鷺宮下新井</small>

(イイ)
各十有五座 叭明治四十年七月奉遷于鷺宮神社殿内合而祀之
明治四十二年十一月立石

すなわち、明治四十年（一九〇七）に周辺の十四社と共に当社に合祀されたことが知らる。偶然鷺宮神社を訪ねて判明せし事実なり。尚、当社は『吾妻鏡』に初見ある古社で、多くの中世文書を伝存せる由。女体社の旧社地については、かつての別当寺であった寿徳寺（真言宗、鷺宮町上内）の住職に尋ねたところ、寺から三百メートル

ばかり離れたところに子供の頃はそれらしき跡があったというが、現在は畑地化して定かには確認できず。

②⑤ 埼玉県久喜市江面一三四五番地 久伊豆神社

久喜市史調査報告書第三集『久喜の祭りと行事』（一九八四年）によれば、明治四十一年（一九〇八）七月十六日に、白山・神明・厳島・第六天・稲魂・大六天・女体宮を現久喜市江面に鎮座する久伊豆神社に合祀した旨が知らる。この女体宮とは、『新編武蔵風土記稿』卷之二百十一、埼玉郡之十三、江面村の項に「女體權現社」と見ゆるものなり。久伊豆神社を訪れしが、前項の鷺宮神社の如き合祀碑は見あたらず。当社は東北自動車沿いに立地。境内は狭く、樹木も少なし。鳥居をくぐると正面に真新しい入母屋造りの拝殿と、奥に覆堂入りの本殿（社殿の造りは不明）あり。本殿の向って左手に石碑三基あり。まず一つは「男跡神社 女跡神社 社宮司神社 志羅山神社」の四神社名を横に列記したもの。建立の趣旨は不明だが、裏面に大正十一年（一九二二）一月の年紀と、村社久伊豆神社氏子總代野口藤吉ほか三名と区長、社掌などの建立者の名を記す。合祀碑の一種かとも思えるが、それならば前記二神名があるはず。男体・女体の双方が見えるところから、むしろ筑波山信仰と関わりのあるものか。他の二つの碑は、昭和四年（一九二九）建立の正一位稻荷大明神碑と昭和三十三年（一九五八）建立の伊勢參宮記念碑なり。他に比較的大きな境内社あるも神名不明。參道脇の手水石には明和八年（一七七二）の年紀と「別當善徳寺」の刻銘あり。境内横の広場でゲートボールに興じる古老の話によれば、当社の周辺はもと善徳寺の田地なりし由。尚、安養山善徳寺（真言宗、久喜市江

面八六四番地）を訪れしが、応待に出た住職夫人は女体社の旧社地を知らずとのこと。

②⑥ 埼玉県久喜市野久喜五九六番地 太田神社

明治八年（一八七五）の『武蔵国郡村誌』第十一巻、埼玉郡村誌巻之十一、古久喜村の項に所見される二社の「女体社」（これは『新編武蔵風土記稿』には見えず）は、現久喜市野久喜の太田神社に合祀されたと推定される。このことは久喜市史調査報告書第一集『地誌』（一九八三年）や前掲の同第三集『久喜の祭りと行事』などにも指摘されるが、境内に建つ合祀碑によっても明確に知らる。次にその碑文を引用す。

太田神社由来記

雷電 神社 野久喜
千勝 神社 総鎮守
女体神社 古久喜
稲荷神社 上宿
香取神社 香取
青瀧神社 出来野
稲荷神社 丸島
神明神社 壹の坪

明治四十年十一月左の諸社を合祀して改称す
白山神社 本田
浅間神社 本田
女体神社 和田
浅間神社 中島
神明神社 壹の坪

昭和三十二年十一月

神社本庁顧問文学博士 河野省三書

※裏に世話人・協力者等の氏名を記すが省略す。

この碑文の建立されたのは半世紀後の昭和三十二年（一九五七）であり、その文面も意味がやや取りにくい、明治四十年に女体社二社を含む合計十社が雷電神社に合祀せられ、これがさらに太田神社と改称された経緯を示すと理解される（前掲『地誌』所引の『神

社明細帳』でも同様の趣旨が記される。但し、合祀された日付は同年八月十七日、十月三日、十一月一日と、三次にわたって段階的に合祀されたものの如し。太田神社の現況は、周囲を宅地に囲まれて境内は狭まり、参道入口もわかりにくい。鳥居をくぐると正面に入母屋造り、本瓦葺の拝殿、その背後に流造り、銅板葺の本殿が続く。境内社として浅間神社、稲荷神社等二、三あり。また、明治四十二年（一九〇九）および大正六年（一九一七）銘の「伊勢太々神楽」碑あり。女体社のかつての所在地は、『武蔵国郡村誌』の記事や前引の合祀碑から古久喜と和田であったことが知られるが、旧社地までは確認できず。各々の別当寺も、『新編武蔵風土記稿』にこれらの女体社が登載されていないため、今のところ不明とするほかなし。

②⑦ 東京都大田区東嶺町三一番一七号 白山神社

『新編武蔵風土記稿』巻之四十四、荏原郡之六、嶺村の項に見える「女體權現社（見捨地七畝、社一間四方前に名階七級あり、柱間九尺祭壇九月四日）」が当社のことらしい。『大田区史（資料編）』（民俗）（一九八三年）第四章第一節の「神社の変遷」のところに、『東京府史料』『神社明細帳』等に拠りつつ、明治末期に社号が改められた旨を記す。環八通りに面した社地はほぼ方形。境内はやや広いが樹木はほとんどなく、中央に寺院建築を思わせる入母屋造り、瓦葺の本殿一字がポツンと建つのみ。背面に出張りのあるところよりすれば、これは覆堂を兼ねた拝殿で、本殿は内部にあるとみるべきか。正面軒下の唐獅子の彫物は見事だが、建築年代は近世末以後のものと思われる。境内にあるものと言え、入口の社号を刻した標柱、石鳥居、明治三十九年（一九〇六）奉納の

狛犬一対、力石二個、忠魂碑一基、および左隅の神楽殿、社務所など。境内社や庚申塔の類いが全く見あたらないのは不審。案内板もないため、女体社を合祀した事実は現状からは推し測りがたし。西方一キロメートル程のところを多摩川が流る。

⑳ 埼玉県北葛飾郡吉川町川藤六九四番地 武輝神社

JR武蔵野線吉川駅の北約三キロメートルの地点、中川沿いに立地。境内入口の案内板によって、当社は明治四年（一八七二）に「武輝」の社号に改め（旧社号は香取社らしい）、ついで明治四十五年（一九一三）の「神社合祀令」に基づいて「女体様」を含む六神十一社を合祀した旨が知らる。女体様とは『新編武蔵風土記稿』巻之三十四、葛飾郡之十五、川藤村の項に「女體社（小名本山、藤の嶺守なり、東泉寺持、何の神たることを詳にせず）」と見えるものにあたれり。旧社地は不明だが、前記の案内板によれば「川藤川岸」に鎮座していたというから、現在の武輝神社よりさらに西の、中川のすぐほとりにあつたものか。さて、武輝神社の境内には比較的樹木が多いが、さほど古木と思われるものはなし。社殿は入母屋造り、トタン葺の拝殿、および流造り、トタン葺の覆堂入りの本殿。他に境内社二社あるが、神名は不詳。本殿背後に水天宮、稲荷大明神などの石祠が数基あり。その一つには延享四年（一七四七）銘が判読可能。当所からは東遠方に筑波山をくつきりと望見できる。

㉑ 埼玉県北葛飾郡吉川町下内川八〇二番地 大岩神社

『新編武蔵風土記稿』巻之三十四、葛飾郡之十五、下内川村の項に「女體權現社五（一は正覺院、二は正明院、三は金剛寺もち）」とあり、当村の鎮守社として女体社が五社も存在したことが知らる。

『角川日本地名大辞典11埼玉県』（一九八〇年）によると、この五社はいずれも現吉川町下内川の大岩神社に合祀されている由。『新編武蔵風土記稿』によれば当村には他に天神社二社が見えるが、『全国神社名鑑』では吉川町の下内川地区の神社は大岩神社のみなので、天神社も当社に合祀されたとみるべきか。『吉川町史』は未刊であり、吉川町教育委員会編『わたしたちの郷土 よしかわ地名編』（一九八二年）にも、この点に関する記述はなく、今後検討を要す。

さて、大岩神社は入母屋造り、トタン葺の社殿が一字のみ。これは拝殿で内部に本殿を有する形式なのか、それとも本殿で内部に宮殿を有するものなのかは、外見上ではにわかには判断しがたし。狭い境内には他に、昭和三年（一九三三）建立の鳥居、石燈籠一対、狛犬一対、昭和八年奉納の敷石一基、および境内社として「浅間大神」などの石祠が三基あり。社地の東方数メートルのところを江戸川が南北に貫流す。あたりは一面に田園地帯が広がるが、神社の周辺だけは人家が建ち並び、集落を形成す。隣接して岩間山正覚院あり。前掲『新編武蔵風土記稿』の記事に照らして、五社の女体社のいずれかの別当寺であつたことは疑いなし。従つて、やはり大岩神社の社地はいずれかの女体社の社地であつたと思われる。

※以上のほかに、埼玉県北葛飾郡吉川町上内川二二二番地の内川神社と、神奈川県横浜市金沢区富岡東四丁目の富岡八幡宮の現地調査を行なった。『新編武蔵風土記稿』巻之三十四、葛飾郡之十五、上内川村の項に「女體權現社四」と見え、同

書卷之七十六、久良岐郡之四の富岡村の項に「女體權現社」と見えるが、『全国神社名鑑』によれば、現在吉川町の上内川地区に鎮座するのは内川神社一社であり、同様に横浜市金沢区の富岡地区に鎮座するのは富岡八幡宮一社のみなので、これらはかつての女体社が合祀されている神社に、一応比定されるからである。しかし、これまでの現地調査の結果では、それについての確証を得るには至っておらず、他の所在不明の女体社と共に今後の検討に期したいと思う。

三、女体社の成立事情とその宗教的性格の解明に向けての覚書

(1) 分布状況の特徴とグループ分け

合計十回におよぶ現地調査により、現存する女体社二十一社、それと他の神社に合祀されたもの、もしくは他の神社と合祀するなどして社名の変ったものなど七例（十三社）を確認することができた。この一連の調査の結果、女体社と称する神社は社殿の形式、境内の状況、神社としての規模などの点においては、一般の神社とはとんだ大差のないことがわかった。従って、「女体」という特異な社名を名乗るとは言え、今日では神社そのものは、何の変哲もない村落神社化していると言ってさしつかえない。

ところが、立地条件もしくは周辺の環境という点に関しては、女体社に固有の特徴のあることが判明した。すなわち、いずれも河川・用水に沿って鎮座するという事実である（表Ⅲ参照）。この点に着目すると、関東地方の女体社群は大きく三つのグループに分類す

ることが可能となる。まず一つは江戸川・中川（庄内古川）・古利根川・元荒川・綾瀬川などの流域に分布するものである。これらを一群とみることでできる理由は、近世初頭に改修される以前の利根川の本流は古利根川であって、元荒川や綾瀬川などはその支流を構成していたこと、また江戸川はかつての庄内古川（中川）の下流の太日川に利根川の河道をつないで形成されたものである点である。⁽¹⁾

すなわち、この地域の女体社は利根川水系の女体社群として把握することができるのである。ここに属するとみられるのは十二、三社あり、数としては最も多い。第二は、かつての見沼に面したといわれる足立郡三室村の女体社（現浦和市宮本の氷川女体神社）を中心に、見沼代用水およびその支流をなす黒沼用水・新川用水などに沿って分布するもので、約八社を指摘することができる。これを見沼代用水本支流の女体社群と規定しておきたい。尚、見沼溜井を干拓して、代用水路開鑿工事が完成したのは享保十三年（一七二八）のことであり、この第二グループの女体社群の成立が実際に用水の敷設と関係あるとすれば、それらの勧請年代を推定する手がかりともなろう。第三のグループは多摩川の沿岸、ないしはそこから比較的近いところに分布するものである。これが五社あり、多摩川水系の女体社群と呼ぶことができると思う。しかし、以上の三グループに属しないものも一、二ある。その一つは久良岐郡富岡村の女体社（富岡村は現横浜市金沢区富岡。但し神社の所在は不明）だが、舟運を利用すれば多摩川の河口とは比較的近いので、これはとりあえず第三グループに含めておきたい。それに対して、栃木県真岡市に現存する熊野女体神社は、熊野信仰の影響を受けていることなど、いろいろ

面で他の女体社と異質であり、しかも地理的にも利根川とはあまりにも離れ過ぎているところから、いずれにも属しない単独型とみるほかないであろう。以上のような分布状況の違いが、おそらく成立時期、勧請の背景、信仰の内容などの違いとも重なり合うものと思われる。

ところで、これらの女体社の研究史についてだが、管見の範囲ではほとんど見当たらない。ことに利根川流域の神社分布に関しては、これまで西角井正慶氏⁽³⁾、荻原龍夫氏⁽⁴⁾、倉林正次・黒川弘賢・坪井洋文三氏のグループ⁽⁵⁾、および北見俊夫氏⁽⁶⁾など多くの先学によって、詳しい調査研究がなされており、利根川の上・中・下流域の各々の神社信仰の相違や祭祀圏の問題、あるいは河川が文化伝播の媒介になるといった重要な指摘がなされてきたにもかかわらず、女体社の存在については、以上のいずれの研究においても触れられなかった。その意味で、本研究はこの地域の神社研究に全く新しい素材を提供するものであると言える。

(2) 成立時期をめぐる問題

関東地方の女体社群の勧請された時期を解明するには、伝承や現地調査に頼るわけにはいかず、やはり原則として文献史料に依拠せざるを得ない。しかし、女体社の関連史料は極めて少なく、基本文献としては『新編武蔵風土記稿』がほとんど唯一のものである以上、旧武蔵国内に関しては、それが編纂された文政十一年（一八二八）が下限であると言えないのが現状である。ただ、このうち足立郡三室村の女体社については比較的多くの史料が残り、建武四年（一三三七）八月五日性尊筆写の大般若経奥書に「建武四年^{丁丑}七

月六日辰時、女體大明神御示現日」とある記事⁽⁷⁾を初見として、「女體宮神主」宛の元龜三年（一五七三）十月廿一日北条氏印判状など、中世に遡りうるものを数点有している。また、埼玉郡上内村の女體權現社（現在は埼玉県鷲宮町の鷲宮神社に合祀）は、『新編武蔵風土記稿』の記事に「延寶七年再興の棟札に天正十五年二月法印圓範建立すとあり」と見えるから、天正十五年に創建されたとみてほぼ誤りないだろう。天正と言え、埼玉郡船越村（現加須市船越）の女体社の別当寺であった如体寺は、同寺過去帳に天正十年（一五八二）の創建で、開山は寛永二年（一六二五）に入寂した法印教山である旨が記されるといふ⁽⁹⁾。従って、この女体社とほぼ同時期の成立かと思われるが、現本殿の天井部には「元禄十六^{癸未}三月廿三日奉建立如體權現國ヶ長久處」といふ、やや時代が下がることを示唆する墨書銘もある⁽¹⁰⁾。但し、現存する社殿の中には再建されたものも少なくない点を考慮すれば、棟札や墨書銘の年紀が直ちに創建年代を示す根拠にならないことは言うまでもない。このほかに、栃木県真岡市の熊野女体神社も、『真岡市史』や『栃木県の地名』などでは天正五年（一五七七）の勧請とされているが、典拠は不詳である。いずれにしても乏しい史料の中で、以上のように成立が織豊期以前に遡りうることを示すものがある点は注目し値しよう。

ところで、水系が女体社群の勧請と密接な関連があったと仮定すると、勧請の時期をある程度限定することも可能となる。例えば、利根川水系の女体社群の場合、利根川治水のための改修事業は文禄三年（一五九四）に、忍城主松平忠吉の家臣小笠原三郎左衛門によって始められたのが嚆矢とされるので、勧請された時期も一応それ

表Ⅲ 女体社と河川・用水との関係

※『新編武蔵風土記稿』に所見の女体社（社名・河川名の表記は原則として同書による）

所 在 地 と 神 社 名	（現 状）	付 近 の 河 川、用 水 等
葛飾郡彦野村	女體権現社（埼玉県三郷市彦野、女体神社）	古利根川（中川）、江戸川、葛西用水
彦糸村	女體権現社（埼玉県三郷市彦糸、女体神社）	古利根川（中川）、江戸川、東葛西用水
采女新田	女體権現社（埼玉県三郷市采女、女体神社）	古利根川（中川）、江戸川、東葛西用水
樋ノ口村	女體権現社（千葉県松戸市樋野口、女体神社）	江戸川、古江戸川、
川藤村	女體社（埼玉県吉川町川藤、武輝神社に合祀）	古利根川（中川）、東葛西用水、二郷半領新田用水
上内川村	女體権現社（四社）	庄内古川（中川）、江戸川、二郷半領新田用水
下内川村	如體権現社（埼玉県吉川町下内川、大岩神社に合祀）	庄内古川（中川）、江戸川、二郷半領新田用水
牛島村	女體社（埼玉県春日部市牛島、女体神社）	古利根川、庄内古川、倉松落堀
荏原郡嶺村	女體権現社（東京郡太田区東嶺町、白山神社と改称）	多磨川、六郷用水
橘樹郡馬絹村	女體権現社（神奈川県川崎市高津区馬絹、馬絹神社と改称）	多磨川、（用水、溜井あり）
南河原村	女體権現社（神奈川県川崎市幸区幸町、女体神社）	多磨川、大師河原用水
戸手村	女體権現社（神奈川県川崎市幸区紺屋町、女体神社）	多磨川、川崎大用水、大師河原用水
久良岐郡富岡村	女體権現社	多磨川、川崎大用水、大師河原用水
足立郡中曽根村	女體社（埼玉県草加市中根町、女体神社）	新綾瀬川、綾瀬川
三室村	女體社（埼玉県浦和市宮本、氷川女体神社）	三沼代用水、芝川
内野村	女體権現社	三沼代用水、芝川
大間木村	女體明神社（埼玉県浦和市大間木、氷川女体神社）	三沼代用水、芝川
埼玉郡菱塚村	女體権現社（埼玉県越谷市川柳町、女体神社）	古綾瀬川、元芝川、八条用水
柿木村	女體社（埼玉県草加市柿木町、女体神社）	古利根川
平方村	女體社（埼玉県越谷市平方、女帝神社）	古利根川、葛西用水
梅田村	女體社（埼玉県春日部市梅田、女体神社）	古利根川、古隅田川、黒沼用水
船越村	女體社（埼玉県加須市船越、如体神社）	新川用水
芋莖村	女體社（埼玉県騎西町芋莖、女体神社）	新川用水、星川
江面村	女體権現社（埼玉県久喜市江面、久伊豆神社に合祀）	新川用水
上内村	女體権現社（埼玉県鷺宮町鷺宮、鷺宮神社に合祀）	新川用水
袋村	女體社（埼玉県吹上町袋、袋神社と改称）	元荒川、忍川、成田用水

※『新編武蔵風土記稿』に未見の女体社、および旧武蔵国以外の女体社

埼玉県久喜市野久喜五九六	太田神社（旧埼玉郡野久喜村の女体社二社を合祀）
千葉県松戸市横須賀二六	女体神社
〃 野田市今上一二二三	女体神社
〃 野田市今上一五一三	女体神社
栃木県真岡市台町二四六〇	熊野女体神社
葛西用水	坂川、江戸川
江戸川	江戸川
行屋川	行屋川

以前であると推定されるのである。また、見沼代用水本支流に沿って鎮座する女体社についても、代用水路開鑿工事が享保十二年（一七二七）に起工され、翌十三年（一七二八）に完成していることから、これ以後の成立とみられるのであり、しかも南北朝期に遡りうる三室村の女体社から、周辺村落へ勧請されたい点も併せてうかがわれよう。足立郡中曽根村の女体社（現草加市中根町の女体神社）の境内に享保十二年銘の庚申塔があることや、同社に享保十三年銘の銅製幣束受軸が所蔵されていることなどは、その点を裏付ける遺物かもしれない。ただ、見沼代用水支流に位置する埼玉郡般越村（現加須市般越）の女体社の場合、既述したように明らかにそれ以前の成立であることが確かめられるので、やはりこのようにそれだけでは説明のつかない例も存在することは確かである。一方、葛飾郡采女新田の女體權現社（現埼玉県三郷市采女の女体神社）については、采女新田が元禄八年（一六九五）に彦糸村から分村している⁽⁴⁾ので、女体社の勧請もそれと関連づけて理解したくなる。ところが、かつての利根川の本流であった古利根川や中川における河川交通（商品交易）は、すでに中世後期にはかなり発達していたことが

知られ（例えば、古利根川流域には彦名関をはじめ七ヶ所に川関があった⁽⁵⁾）、のちに采女新田が開される地域を含むこの流域の繁栄は中世以前に遡りうる点からすると、勧請を安易に近世の新田開発のみと結びつけることにも問題が出てくるのである⁽⁶⁾。以上のように検討してみると、女体社の成立時期は、勧請された事情や背景、信仰の内容と性格、さらには各女体社群の相互関係なども考慮に入れた上でないと、十分な解明は期待できないと言ってよいだろう。

（以下、次号に続く）

註

- (1) 小野文雄『埼玉県の歴史』（一九七一年）一三〇～一三三頁参照
- (2) 見沼代用水土地改良区編『見沼代用水沿革史』（一九五七年）に詳しい。
- (3) 「祭祀圏の問題」（同氏『古代祭祀と文学』所収、一九六六年）
- (4) 「大河畔における宗教文化伝播の諸相——中世利根川文化圏の一考察——」（肥後先生古稀記念論文集刊行会編『日本文化史研究』掲載、一九六九年。のち同氏『神々と村落』所収、一九七八年）
- (5) 「利根川流域における神社信仰の特徴」（九学会連合利根川流域調査委員会編『利根川——自然・文化・社会』（一九七一年）第五章第二節

- (6) 『川の文化』（一九八一年）。とくに「川の民俗文化」Ⅴ神々の通路としての川
- (7) 稲村担元『武蔵史料銘記集』一三八号
- (8) 『武州文書』第三分冊、三室村女体社神職武笠外記所蔵
- (9) 加須市史編さん室編『加須市の神社・寺院』（一九八三年）
- (10) 埼玉県神社庁神社調査団編『埼玉の神社入間・北埼玉・秩父』（一九八六年）
- (11) 註(1)参照
- (12) 筆者の現地調査による。前章②の草加市中根町の女体神社の項参照
- (13) 草加市史編さん委員会編『草加の社寺』（一九八五年）
- (14) 『新武蔵風土記稿』卷之三十一、葛飾郡之十二、采女新田の項
- (15) 利根川の交通や舟運に関する研究は枚挙に遑がないが、ここではとりあえず遠藤忠「古利根川の中世水路関」（『八潮市史研究』四、一九八二年）を参照のこと。
- (16) なお、中世には彦糸村や采女新田を含む地域は、下川辺荘に属していたことが知られる。こうした中世荘園村落からの視点も今後の課題であらう。

（平成元年十一月三十日 受理）